馬誌

戦場部

五十

一

武備兵法

和書門 類
一七三九五 號
一三。 函
四 架
六二 冊

内閣文庫
和書 類
一七三九五 號
五四 函
六二 冊
二一 架

内閣文庫

番號	和	17395
冊數	62 (51)	
函號	154	455

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak

x-rite colorchecker

国立公文書館
National Archives of Japan

馬誌巻之五十目録

戰塲部

日本政府圖書
淺草文庫

馬誌巻之五十

戦場部

一 馬戦といふハ魚鱗ニ懸りて敵に当り鶴
翼に離まそ敵をうち支蛇に備へて前後
ニ当り鳫行ニ連ねて横をうち一手ニあか
思て別手にも又別手に離まそ一手にか
と前にあるかと思へは後ニぬ事左かと思
へは右に廻り電光石火の如く蜘手角縄

十文字八花形の楽破り駈拔馳通し飛
行自在に乗をさして騎戦一騎を以て万
騎を支ゆる秘術といふなり　馬術要覧

一　或人曰く大川を馬にて渡すに心得方一
の事あり先つ胴長く頭高なる馬は海川
をよく游くといへとも川なと乗て見さる人は
越す時に怪我ありて人馬ともに犬死すへし
古人の傳へを聞くにも河を馬にて乗り
渡すに五騎や十騎なとにて大河の瀬早
き所にて六具を志め鎗を以て手綱にて
越す人はいかにも馬の上手にても假令馬よく
游ぐといへとも乗渡し難かるへし先つ川
上の方の障泥を巻鐙は水にて競立されて
び志よこね折るか抜るかなるか三つの内
にて鐙落るものなれど兼てより細縄をと
もつて留るなりさて夫にても水強ければ
鐙を踏はつし手綱を取放しけるに離れなば
として死するといへり予ねて川にては鞍の上

を水洗ひ流すによりて鞍つねに乗てたし
居らぬものなり惣別馬ハ頭を挙て三所
ハ水の中にありて立游きするものなり勝れ
て馬の水を得たるに乗人の上手にても馬の
三頭を浮上て所を同しく游がする人もまゝ
あることし百疋二百疋の馬の内ハ大方右の如く
に立游きなりさりなから乗人の上手なり
て乗やうに秘傳もありや昔田原の又太郎甚
後佐々木梶原名馬に乗て宇治川を渡すハ

六具を志め弓を以て渡しゝとなり大軍
を以て河上を渡せて下ハ必す浅きものせ
といへり宇治川古へも今の川の如くに浅き
所ハさもありぬへし利根川ハ今も自由
にハ渡り難かるへし甲都川などハ未た渡
されるゝも聞す扨歩兵のその馬の尾に
取附渡りと加勢に成るといへハ首の尾を
水底にするものなれ取附とある馬の尻
掛のようなものを取川下を馬と共に游くなり

利根川甲斐川宇治川此外國々よ水の早
き大河少すあるとなれと乗人の出立馬の
拵え人馬のなれ上手にて乗渡さんにいさ
知らす常の馬ね装束にて六具を志めて
鎗を持歩立一両人も馬なんとに取付早
き大川を一騎や二騎ゐて川一文字み乗渡
さん事思もよらし人馬共に身のかしらへ
かゝりて危なき形み渡も渡りみ乗渡す
とも向ふに岸なとありて人馬共み乗渡

したるとも安堵の氣づかしありて先へ乗上
らんとして馬ハ人より猶あせりかゝらんと
して馬引かつぎて逆様に落る事もあり此
ありされハ前廣より先の目當一所なる一し
とあり慶長のころ攝州大坂合戦の時
節さしたる川にてもなき所ゐ乗入て岸
高みして人馬共に大方死したるよそ常
ハ六具をも堅めて笠合羽なと着したち付
鞭旅装束にて馬をも乗る人も大きな早川

を乗りつけさる人ハ必す死する事あるへ
し惣して水ハ深きほと身ハよく浮ぶ
川より海ハ潮ありて猶浮くものなりといへ
とされとも川ハ游くみちあり海ハ游くみ
ちもあらぬものなりいつれも海川ともに風
あるときハ猶更大事なりある人敦盛の海
へ馬を乗入玉ふ所を書たる絵を見てい
ひけるハ此絵ハ下手の書たる絵なりといふ又
ある人の申ハ下手の絵とハ證據あるやと

いへハ答て曰く深き海中に乗入たるみハ
馬の尾計見ゆる事なし爰をもつて下手
とおもふとそされハ武士ハ弓馬の家に生
まれたれハ此道ハたとへ不要用みても一遍
ハ知りおくへき事なり馬百首の中に
巖石や海と川とを渡るときハ
只乗人の心ありてそよる　語傳集

一 敵陣近く働きせの川あるに敵の川を越す
越さざるの見分あり

一 私云く心ハ敵味方ともに川ヲ隔て陣を取
備を設たる時に敵川を越ゝ都せんと
いふ事をも物見ニ出て見切やう覚悟り
凡て川を越んとする敵ハ常ニの様子
みてハ越さしむるものあり故ニ馬上の兵多
くして歩者をも連す障泥をとらし
うつわを取て乗廻ニニ丸く成て川上
の方へ進むものあり又ハ或大将敵
と川を隔て陣を取けるに敵もし川を

越来らん備を設くるとも人数を分る
ともニ千余にも不足して味方も変を設くへ
けきたとえまう作候を両人ニ申付て見
せけるに一人の作候来て申けるハ敵ハ川
を越すまきにてハ子細ハ川を越す
敵ハかけなる障泥をとらし六具を志め
手縄を宜め腹帯を志め歩者を掃ひ
て見ゆるものみて候ハゞ此敵更に斬の
如くあらさるもへみかく見切ひとあり 兵法物見

一元亀三年五月中旬武田信玄入道晴信駿州田中の城に軍兵を籠め遠近邊に相はたらきける

家康公彼を退治すへしとて大井川の河岸まて御出馬ありしにおり節大井川以の外に水出て渡すへきやうもなかりけれは田中の軍勢洪水を得たりとして向の岸に出て大いに罵りける

家康公御覧ありて水かさ少しも干落よりし武田の奴原渡らす討取んと歯かみをなして怒り給へとも満水なれは出合申ものなかりし處に大河内善一郎政綱進み出何程の事候はへき水かさの干落を待つまても候まし某いて瀬踏を仕り御覧に入れへしとて手勢五十騎與力七十五騎に下知をなし各馬の障泥をとり鐙をつなき肚帯を志め互に鎗筏を組て向ふの洲崎へ斜なめ形に渡すへしとて軍士の足並をそろて

揃ひける。
家康公御覧ありて夥しき大水なれハ渡
する事無用なりと再三制止給へとも政綱ハ
きゝもあへず伊良尾か瀬より馳下り
まつ先に進み漲り落る早川を一百餘騎の
軍兵我先にと騎入乗續き日本無双の早
川なれハ一騎も流されす向の岸に打揚り大井川
の先陣大河内善一郎政綱と名乗て呼はり
叫んて馳かへりける 大河内家傳

一 慶長五年石田三成叛逆を企しかハ
家康公上杉景勝をすてゝ上方に登り給ふ
大井川の向ひなる金谷の宿に御陣をすゑ
しか御供の人々ハ道より島田に残りけり戸塚。
六日大井川の岸に臨て川の面を見渡すに
廿二三日降つゝきたる時雨に水増て逆波
高く漲り流れて渡るへくも見えさりけ
れハ六郷政乗戸塚に向て夜中に案内知ら
す川を渡りてもよしなし是迄追着

まれハ急くへきにもあらす今あハ島田ニ宿
陣して明日川を渡し金谷の方ニ陣に
至り方日見はらしはんやといふ戸澤聞て
方邊のまさらし段一理ありされとも此水夜
の内ニ落つへからす方途と我とハ馬ニて何
か渡り得さらんやといへハ六郷尤と同し。
歩者なとハ明日来よとし島田ニ残し留て
馬強き者をすくりて障泥を蹴たてち
盛安。政乗ハ腰指ニ挑燈を高く付て先
ニ颯と乗入しかハ是を見て續く兵戸澤
勘兵衛を先として騎者とも多く渡し
けり　奥羽永慶軍記

一三州遠州方分國のころ山縣か手ニ人数に
て天龍川近く働くときに折節
徳川家の戦士寡なくして戦ひしかハ味方
利あからん事をさとり舟ニ乗閒やあら
とけん天龍川を抱越にうち入ける忠勝
例の如く跡に下りて只一騎。馬をひかへ十間

もくり游かする所へ後より山縣か先勢百騎
はかりにて詞をかけて追かくるを見るとひとしく
川中より取て返しける其勢ハ龍神の波
瀾を蹴立るか如くなりけしきハいや忍れけ
ん例の平八郎も一騎も駈合せすして逃去
たりけるにて大河を乗越すに中流にして
引返すハ成難き事なるを忠勝かなさる
き兎角筆舌に及ふさるところなりとそ 君臣言行録

一 伊賀越のとき谷川出水して船なし柴舟の
通りけるを中書 本多忠勝の事なり 招かきけへとも船人聞入
すけへハ中書鉄炮を取りためかされけハ是に
船人驚きて船をもとせけれハ上下皆々渡さしめ
其後中書ハ馬の口を取て歩渡りいたされけハ
家ゝハ古臺所人乗をくま跡に居けるを見て又立
帰り馬に乗せ中書ハ馬の口をとりて游き越
されけるよし 武功雑記 國朝大業廣記

一 壽永二年六月一日。源氏。倶利伽羅志雄山。大手
搦手の大將軍一つみなり五万餘騎を引具

して安宅の渡りに押寄たり平家。橋を
引たり水ハ濁て底見えず源氏もさすかに
渡りかねて北の端に扣へたり越中國の住
人石黒宮崎申けるハ我等先に城構へて
待しときハ平家ハ渚をこそ渡てかよひしか
案内者を以て渚の瀬踏をして御覧候へかし
と申けれバ木曽ハ加賀國の住人林六郎光明
を召て汝ハ當國の住人なり河の案内知なら
ん瀬踏仕れと仰ける光明承りてよき馬十

匹を揃へて綱結かけて追入たり鞍爪力
革をひたるまでなりけり木曽川ハ浅かりけり渡
せ者共と下知しける　源平盛衰記

一 河水を渡すに法あり教へに云一騎渡しハ
猶もいちあるし佐々木。梶原の両人生唼。摺墨
に乗て宇治の大川を渡して世に誉を
揚たり田原又太郎。畠山庄司重忠ハ馬筏
の法を以て渡して名を動まして世にいひける
大河あり小河あり深きあり浅きあり

石川あり砂川あり沼川あり常に能馴し
て人馬相親しみておそるゝ功ハあるものと
知へし　馬術要覧

一川を前に陣を取ハ何にても筏にくまれ
候ものを心懸置申すへく候さりなから筏に
組候その是なく又渡さんとしてかなハさる時
ハ道具筏とて鎗なとを組合せ乗渡る
事も候又馬筏とて手綱を互に取組渡す
事も是あり候弱き馬も強き馬にひかれ

造作なく渡るものなり候かやうの事を道
具筏馬筏と申なり　幽斎軍禮書

一佐々木高綱宇治河を渡す條に馬筏を組
て渡して試みたるやと申若多し義経下知
してかやうの河を渡すには馬筏を組み
健馬ハ上手に立て弱き馬をは下手に立よ
馬の足の届んまてハ手綱をくれて游せよ
馬の足たつまハ弓手の手綱を指くつろけ
て妻手の手綱をちと縮めよ四居に乗こ

ほれて游かせよ手綱強く引て馬に引まさ
て過ちすな尾口沈まは前輪にすがれ
馬に石突せさすな常に内鐙を合せよ
我等流るると見ばあふちて敵は定て矢衾を
作て射つらん敵は射るとも相引して鞆(まこう)
を射らるな痛く伏て手変を射らるな射
向の袖を指かさせよあの昊小透間ひらす
な水強くして下らん武者をとく弓の弭を
指出して取付せて游かせよ金(かね)に流して

過ちすな馬の頭を水面よ引立て童すかり
みて弓の本弭をおつけて曳聲を出して
馬は力を副よ流せ者たさと下知しつ
真先かけて流しあり　源平盛衰記
貞丈曰く金に流せとは直に一文字
に流すなり古き詞にて金とは曲尺
を当たるやうなるをいふ⊙手変は
天邉なり今は八幡座といふ冑の頂上
の穴ある所をいふうつむき過ぎは穴

へ矢を射入らるゝを恐るゝなり古作の
冑ハ天邊の穴甚大なり　武器考證

一　佐々木三郎盛綱藤戸を渡し児島合戦
の條に馬にて海を渡すとき右大将家
の御自筆の御下し文に云く古より川を
渡す事ハ先例ありといへとも未た遂に海
を渡す例を聞すと則ち彼島を賜ふの
上。伊豫讃岐両國を賜ひ畢ぬ　源平盛衰記

一　新田義貞越前の府を落らるゝ時我先
に渡さんとする打のそゝたる兵三千餘騎是
を見て一度にさつと打入て弓の本筈を
取ちかへ馬の足の立所をハ手縄をさしく
つろけて歩ませ。足のたゝぬ所をハ馬計
頭をたゝきあけて游かせ真一文字に流を
きつて向の岸へかけ上りたり　太平記

一　豊州耳川の戦に大友方の先手吉弘左近
鑑直。齋藤兵部鎮實等打出て軍評
定するとき鎮實ハ家頼の郎等を召あ

つめ鑑直某なとを左右の先手と仰出さ
きるへし諸軍に従きそは志かるへからすさて
大川を渡すには深く心得ある事なり
乗入場より向ひの上り場の善悪をよく
見極むへし乗入處よきとても上り場悪
しけれは跡勢は取越かね敵にも安々と討
るゝものあり川を渡さんと思ふときは馬
の足並をそろへ勢ひをも出させ其勢ひを以
て乗り入るへし陣取のときは川端より三町

なるひは五町も引退きて備へを立るは此事
あり又川を越え来る敵を川端にては何
としても留らまぬは勢ひあるゆへなり是
によりて川を越え来る敵には五町ほと
引退きて待ち敵川を上り来る處を味方
敵間五町の處を足並そろへ駈けさせ其勢
を以て追崩すへきなり惣して障泥を
解て鐙をたゝすより縄にて力革に結び付
たるがよきとぞ鞐(はつそび)を馬せんの上に引出し

前輪に引揚げ志ゞと志め左の手に取り
右の手にては鎗にても長刀にても我が
持道具を手綱にそへて持べし手綱志む
まじく馬あをむけに返して身抜けをする
ものそるは足の届かさる處にては竿立をさせ
踏だかりにて渡る跡足も届かざれはずるく
と沈みさせて浮上りよ面だかりを出し游ぐ
ぞ乗るその心おけれは馬かしらをと上る
ときは面をおもものぞ綿馬鐙は水に溺まて

忍し板馬せんがよきして寒き時分に綿馬
せんに水志みれて乗る人ぞあるとのなり
とぞ下知しける　大友記

一 上杉家の将士上野の邉塞を攻る事あり
信玄後援たるに後岡の下桂川おふし霖
雨にて大水漲きわり其家をこはちて
後代を細渡してあまじをと試るにさかまく水
に押流さるこられを渡らさまは後援の甲斐
なし流さんとすまじて溺死せんことを危ぶむ

め何せんと評議せらるゝ處に川所の功者あり
けるか古へより川を渡すに小勢は沈没す
れとも大勢は沈没せすと申傳へは宇治川
度々の例(ためし)しその證據にてはむかしは遠
きことを近きところ残臣度々渡りて見れは
一 馬は馬を力らにし人は人をたよりにして
手と手を組鎗を取り大勢のきほひを
以ては自身馬を乗入られ総軍一同に渡さ
れは少しも危からしと申につき信玄聞受

即ち下知して渡さるゝに諸馬は勿論
雑兵小荷駄に至るまて難なく渡り済て
敵を追拂ひ味方なと極いもしたり 碎玉話

一 天正元年信長霊陽院殿を宇治の槙島の
城に攻るとき折しも雨ふりて川水岸をひ
たせり信長馬を水涯に駐めて昔の梶原
佐々木も鬼神にてはよもあらしといひける
處に武者一騎川へうち入たるを見て梶川
弥三郎高盛なるへし梶川討すな歩せと

下知してそこよりわれ先にとうち入て渡
しけり此戦の前に信長黒の馬を梶川に
あたへらる其とき佐長梶川か志し重ねて
の軍に先かけんずるものなりとあざ笑
ひていはもしけり果して其詞に違ハさりけり

常山紀談

一 越中佐々成政退治のために秀吉出馬のと
き尾藤甚右衛門武者奉行にて一番に越
由爰に加賀越中の境。砺波山の道筋にハ
出城多くして通り難し砺波山ハみよしの
宮の北の方へ山のけハしき處を越行の處
馬足立さる道十間もかりあり其とき尾
藤下知しけるハ馬の銜の両方へ差縄を
付馬取両方へ引張手綱を結ひて前輪に
掛り馬の前足を揃へ馬をすへらすへし
とて軍勢悉くこれに従ひ子細なく通
りぬ尾藤かことに其言葉を寿せる勇
士の下知といふへし同時越中に入しか

大河いくつもありておけ立す何とも
馬を游らせぬ。此ハ八月下旬の事なりき
時雨めきて水増けるを尾藤下知して
まつ障泥を両方よりおろし馬亦に持
せ馬の頭を少し川上の方へ引上けて手
綱をかい取前輪の左の手にて取添へ右
の手にてハ手綱を持さいく銜を川上へ
引上る時ハ馬ニ聲を掛馬の両端の眉
間を見鞍の後輪よまり川上の鐙ハ軽く
踏み川下の鐙を強く踏へしと下知せら
きてかくの如くいたし大勢難なく川を
越したりとそ 前橋舊藏聞書

一 朝鮮帰陣のとき長船川洪水なりしに
筑前中納言秀詮。大河内政朝を召し古へ
越後の謙信輝虎ハ坂東太郎を越えたりと
聞ぬ予川渡しの稽古ニ此河を渡すへし
と思ふなり如何あらんとの上政朝此比人数
にて此川を渡しけるへき事安きことにては

とかす秀詮以てさらて諸士を下知せよ
此を仰せけるを政朝馬に打乗馳出て只今
川を打渡しけるへきとの事なり各障泥を
取腹帯を志め長く手拭みて轡を繋くへし
といひ船も有るの是なみを揃へ政朝瀬踏す
へしとて真先に乗入りぬ諸勢ハ秀詮を
志中に取包み一度に乗入ける歩若共ハ
其川下を渡りしかと一人も流さす渡
しけり秀詮甚悦ひりて斯の如くの格子

あそハ日本國中の大河に心許なき川ハなし
今日の川越偏に大河内の下知由へなりとて
甚褒美に預りける　大河内家傳

一 秀吉。北條氏政を伐とき馬船を小田原み
まハさすに遠州の御前崎ハむつかしより馬
の事ハいふに及ハす馬道具をも船みのせす
もし誤て馬皮少そしたそ入る器さへ
船中みあれハ必す破損する事度々なり
されを謹て口に馬といふ事をも忌と言

傳へひと申者あり秀吉自筆の状を書て船頭にわたし是を龍宮に達せよ難あるべからずとて舟どもをのり出し彼所に至れて俄に風雨雷電して日中忽ち闇となる其とき右の状を海に投入ければ風雨忽ち志づまりて船恙なかりし其状に云く今度就誅伐北條予使船赴相州小田原。無難可被通之者也。龍宮殿。大閤と書れたり是ハ偶然なるべけれども此類の事すべて民の惑ひより言傳へて其理なく害あるもの多し秀吉學問の力なしといへども生質明敏なるゆへに古の理を識破せり然れとも愚昧の船頭ども聴に慣いて大に恐るべきを慮りて其心を安せんがためなりけり又災殃ハ氣を以てこれを迎て自招くの理を見るものといふべきなり　武将感状記

一 四國の侍軍ハ江州侍の弓矢に同して敵かゝるをも待て取籠めて討んとの仕様なり九州

ハ出羽下野國の弓矢と一同にして未掛りに
してその内一備脇手の如く備へ敵を脇に詰
て若然なしに旗本みさく突かれハ勝如く
思ひ詰大筋違と名付常にこの一戦を好
むよしあり四國ハ如何にも弓矢をおもく取
卒尓の働をせす物毎大事にする軍法
あり四國九州ともに船合戦を好むあり尤
彼が得たる處なり陸の事ハ弱ハ戦ほとにハ
得す陸に上りても味方馬にて弱より馬を下す

ときとと船に馬を乗するときハ鞍の力革通
しの穴より絲を下け左纜あかり鉤るも
のあり大水にて鐙浮ときハ必す流するもの
あり惣別軍陣にハ金鐙を乗すハ毛皮の
障泥も乗すハあるし障泥ハ泥多を含
むあり沼田を渡しハときハ泥付て労れ後ハ
ハ馬進ます早川を渡る时ハ障あるハ障
泥をとれ石川あつて皆をおて手綱ハ
左の手の内をと十文字に引後めすまをあけ

す右ハ尾先をとり、ひけて尻掛の組違ひみ
取添へし尻掛の餘りをハ鞍の後輪の爪に
掛總目ニミと結ひて二重尻掛に後輪へ掛り
立透し川上れは鐙ハ踵を右へ踏をのせて爪
先廣く踏へし川下の鐙ハ腹の方へ踏寄
せて少しも前輪へ掛らすむかふの岸十
間ほかりと見てハ馬必すいれるものなり其
とき聲を掛れハ馬あかるあかまて沈みて
必す鞍離れをするものあり岸近くなる

ほと乗手れ心を静めて手綱を強く引
へからす大方早き河なりとも前と思ふ處
を三間五間川上へ乗掛けて少し流れ上
りみ上るへし餘り上けすしてハ逆まに
行なるへく必す上り兼るものなり敵向ふの岸
に多く防く處ハ必す上り場なり又中ほと
ひて川を渡す時ハ跡より主人召とも早
川のうちみて馬を乗返しなへハ必す水
に押落されて人馬共に死するものあり

向ふの岸まて渡して馬を休めて渡るへ
し他国の知らざる川にても向ふの敵防く
所ハ渡り瀬と心得へし味方の防きハ心得
よ大小河とも広き所瀬なるものなり渦の
有る所ハ上下よ渡り瀬あるものなりうづ巻
ハ如何にもその所中窪なり餘の所ハ渦
ともに流るゝものなり渦のまくハ左の巻なり
り餘の所ハ岸に当りまくなり足の入らぬ
川も大水出てハ二三日ハ足入るものなり砂川
の日有たりに小さく渦の巻て砂もりくと
上り巻くにつきてものる所ハ必す足入るもの
なり泥川ハ埋まなく砂川ハ埋まあり中島
の川上ハ必す埋まありて川向に氣巻ひある
事なり　井諌記

一　戸肥半左衛門と云ものを奥州に立して川を
越して向ふの駈合に人々皆船に乗て馬を
立ならに置て川を越す此半左衛門馬を
川へ打入船に引添て川を渡らしめ

馬の足立所より馬に乗移り一番に先陣せりとぞ此者元ハ越中に居りける後ハ戸澤の手に屬しけるとぞ　前橋舊藏聞書

国立公文書館
National Archives of Japan